

10 障害児教育

鈴尾修司・木村敦子・関 和典・藤村佳令

1 研究テーマのとらえ方

(1) 養護学級の教育目標と「自立に向かう子ども」像

本学級では、「生活力のある児童」を目指している。「生活力のある児童」の姿として次の3つの力を描いている。

- ・ことばや行動で自己を十分に表現し、主体的に行動する力
- ・さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で、生活や学習をする力
- ・いろいろな場面で判断したり、工夫したり継続したりして生活や学習をする力

この3つの力を総合すると「児童がその子なりの考えをもち、よりよい方向を目指して進んで考え、判断し、表現していく（行動していく）力」であり、この力をもつ児童が「自立に向かう子ども」と考える。

(2) 児童の自己決定

昨年度までの研究では、どのように児童一人一人が物事のイメージをしているかということに基づき、児童の実態を次のように捉えて、活動の中に自己決定する場を設定していった。

児童の実態	支援の方法	
自分の日常的な生活の中でしたいこと好きなこと（物）が大まかにある。	児童の日常生活の中で一人一人の好みの傾向を捉え、活動の中に組織していく。	活動していく中で、児童が嫌いなこと、拒否しようとしていることについて明らかに把握していく。
自分の日常的な生活の中でしたいこと好きなこと（物）が確定している。		
自分の日常的な生活の中で具体的な物や活動を2者の中から選ぶ。	選択肢の内容が一人一人の理解に応じて具体的に提示する。	児童が選択しなかったことについて、児童がしなくなかったこと、ほしくなかったことを言語化していく。
学習や活動場面で具体的な2者の中からしたいことを選ぶ。		
学習や活動場面で具体的な2者以上の中からしたいことを選ぶ。		
学習や活動をイメージして、2者以上の中からしたいことを表す。		
学習や活動をイメージして、これまでの経験の中からしたいことを表す。	これまでの経験が想起できるような手がかりを提示する。	児童がイメージしたことは、違うことも提示して、選択できるようにしていく。
自分の生活の中でこれまでの経験を生かして進んで活動していく。		

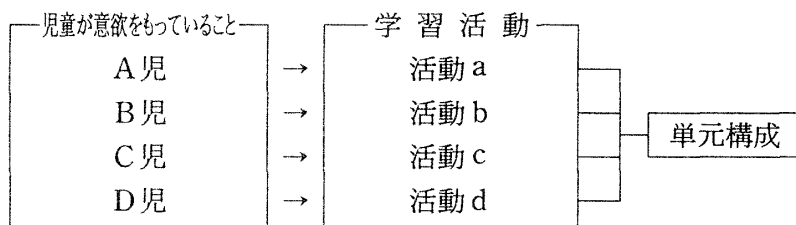
ここでは、「児童が選択すること＝自己決定」という捉え方では、真に生きる力につながっていくものではないということが検討された。すなわち、児童が選択したことが次の活動につながるものであること、本質的な活動内容につながる場所での選択がなされなければならないということが「自己決定」であると考えられる。そこで、活動を一連の流れで見ると、児童が自己決定をしていくための基になるイメージを形成する活動、児童が自己決定をする活動といったようにポイントを絞って設定していくことが必要であると思われた。

一方、児童の生活全般については、「こういう場面で自分で決めて活動する。」といった一人一人の目標をさらに明確にし、そのことにむかっての活動が設定されていく必要があると思われた。

2 本年度の研究推進について

(1) 学習活動の設定

児童が「自分で決めて～しよう。」と主体的に自己決定していくためには、学習活動そのものに意欲的に取り組んでいることが必要である。そこで、日常生活の中で、一人ひとりの児童が、主体的に行っていることは何であるか、どのような活動を好んでいるか、どのような物を好んでいるかといったことを、再度見直し、そのことを基にした単元構成や学習活動の設定を行っていくものである。



(2) 個々の実態と自己決定の場

児童がどのように自己決定していくか、前述したように、一人ひとりの実態は異なっている。したがって、自己決定の場は、個々の実態によって設定される必要がある。そこで、単元全体の中でどこで自己決定するか、1単位時間の中でどこで自己決定するかを明らかにしていくようにした。そして、個々の目標行動の中に、自己決定に関する内容を設定した。

支援の方法としては、昨年度から引き続き、児童が自分のしたいことを自己の判断で決定できるように、選択肢を具体的に示していくようにする。それと同時に、したくないこと、嫌いなことも明確に意識していくような支援の手だてを考えていくものである。

3 取り組みのまとめ

本年度は、「自分で決める場」として自己選択していく場を取り入れた活動を設定した。自己選択をしていくにあたっては、次の点に留意した。

- ・児童が進んで選択しやすい選択肢を提示すること
- ・選択する際に「どちらも好きだけれどこちらを選ぶ」という意識を持つことができるように支援していくこと
- ・集団の中で、積極的に選択していくこと

児童は、提示した選択肢の中から「選ぶ」ことで、活動に能動的に取り組むことができた。今後、選択肢の幅を広げ、自己選択から自己決定へと発展していくためには、「なぜ、これを選んだのか」という一人ひとりの選択行動の意味づけが必要になってくると思われる。

〈参考文献〉 平成7年度 北海道教育大学附属札幌小・中学校「ふじのめ学級」研究紀要